俺は魔剣拾いました

初音カノン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺は魔剣拾いました

【Ｎコード】
Ｎ０５２５Ｘ

【作者名】
初音カノン

【あらすじ】
目覚めると胸が重い気がした。よく見ると女に変身してましたよ（笑）
しかもヤバイ剣を抜いて、魔剣少女に選ばれたっぽいです。
・・・って俺男ですよ？『少女』っておかしいじゃないですか？
美少女と化した主人公（男）が、メイドやらと楽しく戦います。
ハーレム要素を含みますぜぃ？
妄想発散と暇つぶしに始めました。お暇な方、見て貰えると嬉しい

です。

（アットノベルズにも載せてます☆）

01　気が付けば巨乳美人

「うぉ・・・・！？」

少年は今の自分の体に対して酷く絶句していた。いや、今の彼には『少女』と言う方が真っ当だろう。昨日まで男だったのに、気が付くと女になり、大きな胸が付いていたら誰だってそうなるだろう。

（む・・・胸がある？）

今の少年の胸のサイズは『大きい』などという言葉では表せなかった。グラビアアイドル並の『巨乳』とでも言い換えておこうか。

彼は神路竜治。正真正銘男だったが、少女に変身してしまった様だ。

『男なのだから素直に喜ぶべきだ』と野次を飛ばす者もいるだろう。

しかし、胸は実際大きくても邪魔な物に過ぎない事をたった今思い知った。

そんな混乱中の彼の元に可愛い天使が舞い降りたのだ。

「にぃちゃま、ご飯ですよぉ～」

妹の桜がひょっこりドアから顔を出す。甘えた口調は正に天使だ。

そんな2歳しか年下だとは思えないほど幼い妹に、竜治はメロメロだった。

「お・・・・・おぅ。」

突然な桜の登場にはっとする。桜は観察力や洞察力は人の数倍はあるだろう。俺の熱や母の重い病気にいち早く気付いたのはいつも桜だったからだし、桜の書いた観察日記は毎回入選しているからだ。・・・・多分バレるだろうな。

「どうしたのですか？にぃちゃま、お声が変です！」

やはり、いつも通りに喋ったのに桜の目は誤魔化せなかった。正直に言った方が良いのか？そう考えたのだが、俺の頭で『言うな』と言われている気がしたのだ。

「風邪かな、少し喉が痛い気がする。」

「・・・大丈夫ですか？」

どうやら言い訳は信じて貰えたようだ。妹は本気で心配している目をしたからだ。昔から、俺は妹の考えている事が分かる気がするのだ。

「あぁ。母さんには今日飯いらないって言っておいて。」

「はーぃ！お休みなさい。」

桜が出て行って一安心する竜治・・・。

（いやいや！安心したら駄目だろう？どうしてこうなったか考えないと）

そう心の中で問いかける。・・・が彼は急な眠気に襲われた。

（眠いな・・・・。）

俺は眠気に負けてそのまま眠りについてしまった。

01　気が付けば巨乳美人（後書き）

桜（妹）はロリ系ですよ？
想像にお任せしますが。

02　魔剣を抜く者

竜治が目覚めた時には自分の部屋・・・では無く不思議な空間の中にいた。
真っ暗で周りは全く見えないのに対し、ここからは唯一(ゆいいつ)１つの光が見える。
しかしそこに何かがあるのは分かっても、何があるのか全く見えなかった。そしてその瞬間そこに誘われている様な錯覚を受けた。

（彼処(あそこ)に行けという事なのか？）

竜治はその方向に向かおうとする・・・のだが重たくて慣れない巨乳が原因でなかなか進めない。『巨乳って苦労しているのだな』と思いつつ、徐々にその光の放たれているモノが見えてくる。
初めは置物の様に見えたのだがそれが何かすぐに分かった。

（剣・・・・？）

近づくとそこには剣があった。皆を寄せ付けない異様な雰囲気に対し、竜治は自分は呼び止められている様な気がした。そして感じた事の無いエネルギーが感じられた・・・・気がする。
コレは抜いていいのか？俺は躊躇(とまど)う。果たして俺が本当に抜いても良い物なのか。

しかし・・・・俺はソレを抜いてしまった。

その瞬間異様な空気が全て飛んでいく様な衝動に駆られ、その場に

倒れてしまう。
・・・・・気が付くと森の茂みの中にいた。

（場所移動激しすぎるだろ。）

竜治は心でそう呟きつつも周りの様子を伺っていた。何故だ？嫌な予感しかしない。そんな俺の予感は見事に当たった。

「グォォォォォ」
今までに全く聞いた事の無い遠吠えが森林を反響し、一斉に草木が揺れた。低く犬の遠吠えに近いがそんなのとは比べ物にならない恐怖が襲ってきた。

その遠吠えが刻一刻と迫るのが分かった。地震の様な足音が一歩ずつ近づいてくる。

そして姿が現れた。竜の様な生物が明らかにこっちに向かって炎の塊を吐いてくる。っておい！何で俺が狙われないといけないだよ！？ギリギリの所でカスッて今のは当たらなかった。

「ちょっと！何やってるみゃ！？」

後ろから女の子の声が聞こえた。振り向くとこれまた美少女登場！サラサラ髪にクリクリした目、細い体で何故かメイド服。つまり男の理想を背負っているという事だ（笑）

「その魔剣（まけん）あるんだからサクッとやっちゃうみゃ！」

・・・・『サクッ』！？今の効果音はどうかと思うが、何となくイメージは作りやすかった。そのまま意識を集中させる。

「うぉぉぉ！」

ちなみに俺は剣道部に入っているから剣は結構自身があるのだ。俺が容赦なく力強く振るった魔剣は見事に魔物の体の真ん中を突っ切ったようだ。

「うぉ～！やるみ！！お前凄いみゃ～～！」

どうやら俺は勝ったらしい。メイドは魔物の体から出た『何か』を手で捕まえた。

「剣貸すみ。」

「おぅ。」

剣に近づけるとその『何か』は吸収された。

「今のはなんだ？」

「『魂（スピリット）』って言うんだみ。まぁ細かいことは気にすんなみゃ！」

何かいい加減なメイドだな。オイ！

「言い忘れたみが、私は‘アルリス’だみよ。この異世界のウィール（アリス様）に使える者だみゃ。」

だからメイド服かよ・・・・。コイツ可愛いけど、「～み」とか「～みゃ」とか面倒くせぇな。

「聞いてるみ？」

「へぃへぃ」

「竜治は選ばれたのみゃ！魔剣（まけん）に」

02　魔剣を抜く者（後書き）

この後、驚きの展開に！

０３　天空の島と竜（前書き）

アルリス（メイドちゃん）の得意技は何でしょう？

０３　天空の島と竜

「アルリスはみ、前世が猫なのだみゃ！」

あーなるほど。それで猫みたいな喋り方なのかと自分の中で納得していた。そういえばアルリスの動きは身軽だった。メイドで猫ッ子だとは・・・結構いい設定じゃないか。

「何か出来ないの？」

「みゃみゃ！ジャンプは得意なのみゃ♪」

そう言ってジャンプして５ｍぐらいある木に軽く飛んだ。彼女の体は可憐に木に着陸。その間に２回転ジャンプまで繰り出す大技だった。

「ざっとこんなモンに。もっと飛べるに。」

誇らしげなアルリスに突っ込みたい。むしろ猫でもこの高さは飛べないだろ！？

まぁ別に異世界だしいいよな。（何その納得の仕方！？というつっこみ押さえて下さいね）

「ソレにしてもお前凄いに。前来た何人かがその剣触ったら消滅したにゃ～」

「消滅！？どう言う事だ？」

「何か剣触った所から溶けてたに。」

は・・・ははは・・・。

俺もしかしたら溶けてたカモしれないのか！？

・・・・今のは全然聞かなかった事にしようっと。俺はプラス思考で生きて行くんだー。

「そう言えばお前名前なんだっけ。」
「俺は・・・俺はー」
「もう決めたに。エルファだに。」

勝手に決められた。それなら一々聞くなよな！そう言えば俺名前なんだっけ？
まぁ別に良いけど。そう言う事で俺はエルファになったのだ。

「エルファ、お前も呼ばれたみたいだに。」
「えっ何に？」

「神様だに。この異世界の神『ウィール』がお前を呼んだんだに。」
「じゃぁ俺が女に変身したのも、そいつのせいか？」
「知らないに。私に聞くなーにゃ。」

ウィールのせいでこんな姿に変身したのか。いい情報が手に入ったぞ？

「ウィール何処(どこ)にいるんだ？」
「天空」

上を指してそう言った。俺は言われるままに上を見た。
島・・・が浮いてる？全然気が付かなかった。

「彼処にいるに。」
「あんな所行けるのか？」
「おやすいご用に。」

そう言ってアルリスは俺を持ち上げる。『男を女が持ち運ぶのかよ』とつっこみそうになったが、俺の姿は少女。アルリスにとって小さな女の子ぐらい楽勝みたいだった。

「行っくに～～～♪」

・・・って正気かよ！？

俺はてっきりドラ●もんのタケ●プターみたいなの出して貰えんのかと思ったわ。

「って落ちるよ！落ちる！！」

アルリスはジャンプしたが届かなかった。ヤバいって！！

しかしアルリスは至って普通だった。

「いやだから、落ちる落ちって！」

「うるさいに！ここ神域（サンクチュアリー）入ってるからに。ここから落ちないのにゃ」

落ちると思ったのに下には見えない壁の様なモノがあるようだ。しかも普通に歩けるようだ。

そうして歩いて行くとドラ●エで見た事のある様な城が出てきた。

とりあえずデカい。

シーンと静まりかえっている建物の中には神秘的な泉しか見えないかった。

（・・・ここにもさっきの様に見えない何かがあるのだろうか。）

「エルファ、泉の中に剣を構えて入るがよい。」

「えっ！？あぁ」

剣を構え、ゆっくり水に入る。顔まで来て水への恐怖で目をつぶるが、目を開けても空気が吸えた。
（何だ？ここも神域かなんかか？）

「魔剣少女よ、やっと来たか。待ちくたびれた。」

どこからか声が聞こえた。しかし、その声の主は誰か分からなかった。
しかし、その正体はすぐに分かった。目の前に竜がいて此方を見ている。

「待っていたぞ。」
「お前が俺を女に変えたのか？」

平然そうに答えるが、下半身が体ががたがたと揺れているのを見て自分がビビっている事に気付く。

「あぁ。お前の魔力は凄いからな。しかし女じゃないと駄目なんだ。だから変えてやった。」

身勝手な竜だな。しかも上から目線かよ。

「んで？何で俺はココに連れてこられたんだ？」
「私の役目『ウィール』の後継者を捜してるのだが、条件を満たすヤツが中々いなくてな。そんな時お前を見つけてピンと来たんだ。まず魔力が凄いのと、女に慣れているのと、まぁその他諸々でだ。」
「俺はお前に選ばれたのか・・・・。」

選ばれたとかよく分からんが、竜が性転換させて異世界に連れてきたに違いない事はよく分かった。

「俺は結局何をすればいいの？」

面倒くさいから纏めて聞く。

「その剣で魔物とかをヤッちゃって～。世界平和の為にも。そんでウィールになればいいのだ」

０３　天空の島と竜（後書き）

竜を詳しく説明。
ウィール（詳しくはまた）で緑に近い色。飛べそうな羽も付いている。綺麗なブルーの目をしていて、性別不明。
主人公を自動性転換させたように、色々な魔法も使えます。
一応炎も吹けますよ？魔法あるんで使わないカモですが。

04　紋章

「ウィールとは、この世界の魔法を操る事が許される者の事だ。他の者からは“神”とも呼ばれている。その候補者の事を“ネクスト”と呼ぶ。今お前はネクストだと言う事だ。今日から魔法をしっかり覚えろ。」

勝手に決められたのだが俺にも拒否権はある。こんな面倒くさい事何で俺が・・・・。

「拒否権は無い。お前の腕に刻印がされているだろう？それがあったらもう元の世界には行けない。そしてその刻印は一生消えない。そう言う事でお前はココで魔法を覚える他無いのだ」

腕を見ると、変な紋章（タトゥー）が入っていた。全く気付かなかったな。

「そんな訳で頑張ってくれ」

そう言うと、後ろに何も無かったはずの空間に扉が現れる。ここも神域なのか？

振り返ると竜の姿は無かった。

「お疲れ様に〜！何か言われたに？」

アルリスは泉の前で待っていてくれたようだ。

出た瞬間、泉が消えていった。

（この扉に行けって事だよな？何があるんだ・・・・）
ゆっくりドアを開ける。真っ白で何も見えない。どうやら霧が深い森のようだ。
前が見えない。

『シャンシャン・・・シャン・・・シャン』
（気のせいか？鈴の音が聞こえる気がする。）

「シャン・・・シャン・・・シャンシャン」
その音は段々ハッキリしてきた。多分鈴の音。
ゆったりしたメロディに聞こえてくる。

「エルファ、気をつけるみゃ。ヤバスな魔力ありに。」
俺は魔剣を腰から抜いて身構える。
剣を抜いたら、不思議と敵の位置が伝わってきた気がした。

「来る。」
「来るに」

アルリスと声がハモる。
どうやら同じ事えお考えていたようだ。

「シャリン！」

敵は少女だった。
そしてその格好は何とも懐かしかった。

（敵のイメージは竜とかだったのだが、まさか少女だとは。しかも和服！？何で？）

「人間型の魔物もいるに！ソレより気を抜くなに！！」

「奥義！風の神よ、我らに力を．．．．」

その瞬間、何が起こったか分からなかった。
俺の体は宙に浮いた。

「魔法ブロックしろに。馬鹿にー！？」

アルリスが叫んでいる。ブロックってなんだよ！
とりあえず神経を集中させ、風から逃れる事が出来た。

俺は攻める事にした。

「はぁぁぁぁぁぁ！」

剣道で技を決める時どうしても「やぁあ！」って叫んじゃうように、
今叫びたくてしょうがなくなったのだ。

魔剣はその少女の体に刺さった。
・・・・のだが彼女は痛がる所が、表情も変えなかった。
グロテスクな絵図らになる所が血すら出なかった。
そして、彼女の体に刺さった魔剣が抜ける。

「再生完了。」

和服少女の体の穴は塞がった。
そして彼女は静かに（だが不気味に）笑った。

「そなたのお力気に入ったのじゃ！」

彼女はどうやら本気でやり合う気は無かったらしい。力試し・・・
とでも言うのか。
それほどまでにコイツは強いらしい。

「お前の体どうなっているんだ？」
「わしの体は魔法がかかっておる」

機械的な喋り方の和服少女は、このメイド美人（アルリス）と同じくらい美人だ
った。
この世界はとりあえず美人が出るらしいな。

「自由に動ける様になったのじゃ。」

そう言って、着物少女が俺の腕に抱きついた。

「我はそなたの右腕みたいになるのじゃ！」
「エルファにくっつくな～！」

どうやら、お供（？）が増えたようだ。
そして計魔物倒数１匹。

０４　紋章（後書き）

とりあえず美人パラダイスでハーレム作りたいなぁ。
主人公モテモテ～って！

０５　和服少女とメイド少女

今、和服少女とメイドちゃんが後ろにいる。
そして俺は何故か巨乳美少女。

ってよく考えたら何この絵図ら！？
今考えたら男としては結構惜しい展開じゃないか？

「エルファ殿。」
「は・・・はい？」

変な事考えてたから、変な声が出てしまった。

「我の名を聞かんのか？」
「あー、そうだな。名前なんだ？」

（っていうか、そんなに聞いて欲しいのか。）

「アミリ・サラドール・トルマインド・０００１じゃ。」

（・・・・って長ェ！）

「じゃぁ・・・アミリでいいか？」
始めの部分だけでいいだろう。覚えられないしな。
「アミリ・・・。いいのぉ。ソレでいいのじゃ。」
その時にアルリスはアミリの扇をガン見していた。
前世が猫だから何にでも興味があるのか？
「そーいえばぁアミリは扇魔法なんだに？」
アルリスが興味津々に聞いた。
「我は風を操る風者（ウィンター）。魔扇者とも呼ばれるのじゃ」
「にゃ～、そんなのいたんだに！？」
「その流れなら、アルリスは魔猫者か？」
「違うように！！ソレは前世の話にゃ～！双剣を使ってるに～」
そういってアルリス（メイド服ちゃん）は２つ剣を出した。
「この刃先には、毒があるから一撃に！」
双剣の先は少し濡れている気がする。・・・アレが毒かよ。
それに笑顔で触ってる！？アルリスはその毒を触っている。しかも
普通に。

「お・・・お前ソレ触って大丈夫なのか？」
「にゃ～。これは自分の体から出てる毒に。だからダイジョーV！」

（自分の体から毒・・・・。）
あくまでも真面目な顔で喋っているアルリスに突っ込めなかった。
俺の中での突っ込みは心の中で抑えてやった。

毒の話はもうスルーしちゃってくれ！俺からのお願いだ。

「でも何故あなたはそんな格好を？」

いいタイミングでアルリスのメイド姿の事をアミリが聞いた。
ソレ俺も結構気になってたんだよな。

「これが天空から降ってきたの～。見たら可愛いし。いいやーみたいな？」

何その理由・・・。天空から振ってきた時点で、あの浮き島の竜の願望だろうな。

よく見ると、和服少女とメイド少女って対照的だな。
まぁ２人とも美系っていうのは同じだが。

「そういえば我は魔物と戦いたいのじゃが。」

「私もに～！」

アミリの意見に賛成のアルリスは腕をブルンブルン回した。
また魔物と戦うのか・・・はぁ。気がもの凄く重いのだが。

「行くか。」

「お～う！」
「はい！」

０５　和服少女とメイド少女（後書き）

次回、異世界話お待ちかねの魔物退治しますぜ？
（Ｍａｙｂｅ）

06　魔力上昇（パワーアップ）

「でも行くってどこに？」

俺は肝心な事を何も知らされていない。『行こう』とか格好つけてしまったが。

「良い案あるに～！悪魔（ボス）たちを倒していくのが良いと思うに。悪いヤツを倒せば、ウィールに近づくに！」

「我もそう思うのじゃが・・・。本当に悪魔は強いのじゃ。エルファが倒せる相手かどうか。」

「その心配なら大丈夫に！3人ならいけるし、エルフェのパワーアップ方法を竜（ウィール）に聞いたに。」

「ソレは何じゃ？」

「私たちがドキドキさせたら上がるーって」

「ドキドキ？」

ど・・・ドキドキって何だよ！？竜は何を言ったんだ？

アルリスはごにょごにょとアミリに何かを言う。

「俺にも教えてくれよ。」

「エルフェ、目を閉じるに。」

「ん？こうか？」

その瞬間、唇に何かが当たった。感触は柔らかく、優しい臭いがす

る。

・・・目を開けると、ソレはアルリスの唇だと分かった。

「おお・・・お前!?」（混乱中）

「黙るに。じゃないと効果ないに。」

重なったまま1分は過ぎただろうな。

いつまで待てばいいんだ？

「これで良し。」

そう言ってアルリスは唇を離した。

「魔女と儀式をすればレベルアップするに。今ので10倍ぐらい強くなったと思うにゃ。」

「えっ？お前、魔女なのか？」

「私（アルリス）もアミリも魔女に。ちなみに悪魔も魔女に。魔女の悪役が悪魔って呼ばれるに。今ので大体意味分かるに？」

は？全然分からない。悪魔は魔女で、彼女（アルリスたち）も魔女って事か？

「じゃぁー次はアミリの番だに。」

そして急にアミルの唇が近づく。

「・・・ってちょっと待て！この流れだと、もしかして・・・悪魔とも接吻（キス）をしないと駄目なのか！？」
「まぁ勝てたらそうなるに。それよりうるさいから黙るに。」

そして、アミリの唇とも重なった。
・・・俺ってこんな美女たちと接吻（キス）出来るだけでも幸せ者なのかな。
あー。でも周りからはＧＬ炸裂だろうがな。
いいんだよ、別に。周りからはそう見られたって。（何故か開き直っている）

俺のレベルは５０倍上がった。

０６　魔力上昇（パワーアップ）（後書き）

次こそ戦いシーンなり！！
（Ｍａｙｂｅ）

気ままなヤツなので。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0525x/

俺は魔剣拾いました

2011年10月2日16時24分発行